



学校だより

令和5年9月29日

10月号

学校教育目標
～生き生き日枝っ子～

横浜市立日枝小学校



「日枝っ子の育ちと本気」

校長 加藤 智敏

ある日、楽しみにしていた授業を参観しようとする教室に向かい、ペンをとって記録を始めました。先生が提示した南魚沼の米作りについての資料をもとに話し合いが進む中、Aさんが発言をします。

Aさん：「ぼくは今までのコシヒカリを自分なら作りたいです。理由は、[おいしさ]の項目は、どっちも[とってもおいしい]じゃないですか。でも、全く同じなんてことはありえないと思うんです！品種改良の方もおいしいけど、こっちもおいしいよって言う…。」「おいしいから食べてほしいんだよ。」「なんて言ったらいいだろう。」「

Bさん：「言葉では伝えられない？」

先生：「なんで同じわけないって思ったの？」

Aさん：「だって、作っている人の想いというか。」「

Cさん：「まごころ？」 Dさん：「おいしくなれって？」「愛情かな。」「

Aさん：「苦労がつまっているんだよ！」「この品種を残していかなければならないという想いがある。だからまた違うおいしさが詰まっている。だから全く同じなんてことはないと思う！」

教師が提示した資料に書かれた言葉を鵜呑みにするのではなく批判的に捉えた発言であり、Aさんの“問い”がそこには見て取れました。その発言の熱量と事象の捉え方に驚かされ、私はペンを止めて聴き入りました。続いて発言したEさんは、「Aさんにつけたしで、僕も今までのコシヒカリを育てたいです。今までのコシヒカリにはコシヒカリの元祖というか、自然のおいしさがあると思うからです。」とAさんにつなげる発言をしたかと思うと、しばらくして手を挙げたFさんは、「僕なら品種改良したものを育てたい。稲が強いから。たくさん作って、たくさん儲けたほうがいい。でも、今までのコシヒカリをMさん（この授業で取り上げた南魚沼の米農家の方）は育てるって言うでしょ、それには何らかの理由があるはずだと思う。それは何なのだろう。」と反するような意見、そして新たに見出した問いを皆に投げ掛けます。子どもたちが本気の対話を始めていることが分かりました。

「生き生き日枝っ子」とは、このように子ども同士の本気のやりとりの中で、自分の考えが安定したり、不安定になったり、揺さぶられたり、揺り動かされたりする中で、育っていくのではないかと感じた瞬間でした。学校の意義とは、このような協働的な学びの中で、新たな“問い”に向かう主体性を育み、深く、深く学んでいくことができる、そこにあるのではないかと思います。

その授業を行った先生は、「先生が本気にならないと子どもも本気にはならない」と話してくれました。普段は授業中に発言が少なかった子も、この授業で何度も進んで発言していました。やはり授業で子どもは変わるのだな、そして、授業で教師も変わるのだなとうれしく思いました。

10月13日（金）に、第113回日枝小学校運動会が、全保護者・来賓を迎えて行われます。コロナ禍のこれまでは、入場制限等を設けての開催でしたが、4年ぶりに全校児童が揃っての開催となります。今、運動場では、運動会の練習が行われています。校長室にも子どもたちの明るい声が聞こえてきます。自分たちの運動会をよりよいものにしてと主体的に、協働的に取り組む子どもたちの育ちの様子をぜひご覧になってください。きっと、仲間との関わりを通して成長し続ける子どもたちの姿は、私たちに喜びを与えてくれるものと信じています。

今後も皆様のより一層の学校参画、お力添えをよろしくお願いいたします。